

黒田清輝先生のスケッチブック

和田英作

美術研究所に保存されてゐる黒田清輝先生の作品の中、素描のスケッチ、畫稿の類としては、木炭畫及び「昔語り」下繪を別にして、スケッチブックが十九冊と、一枚づゝ臺紙に貼つて整理された素描類七十四枚とがある。これ等は總て、先生の長逝後、黒田家に遺されてあつたのを美術研究所に寄贈されたもので、その物の性質として、畫家の手控へ或は草稿の意味であつて、人に見せる爲に描かれたものではないから、この外に餘り世間に出てゐるものはないと思はれる。

スケッチブックはその十九冊を年代順に並べて見ると、最初のものは1886(明治十九年)の日附があり、先生二十一歳で、その年の五月にはラファエル・コラン先生の紹介でルーヴル美術館に於ける模寫の許可を得、初めて石像の寫生及びイタリア派素描畫の模寫を始められ、十月に法科大學に入學された年のものである。この頃は、繪の稽古を始めながら、未だ専門の畫家になる決心はして居られなかつた。その後のものが引き續いてあり、時に途絶えたりしてゐるが、最後が大正七年で終つてゐる。以後先生の歿くなられた大正十三年までの間には、スケッチブックとしては何も遺されてゐない。

スケッチブックと云ふものは、畫家によつて始終懷中してゐる人と、旅行などの特別な場合だけ持つ人とあるやうであるが、先生はこの特別な場合にのみ持つ方であつたらしい。先生のスケッチブックを見ると、大部分が旅行の記録のやうになつてゐる。初期の部分、滯歐中のものは中で九冊あるが、これ等も殆ど總てが諸方を旅行された時の寫生か、或は美術學校のDuvetと云ふ先生の解剖學の講義の筆記などであり、居常の間に周圍のものをスケッチする爲のものとは見えない。歸朝後のものも同様で、大體旅行の記念のやうである。スケッチブックは、時に旅の小遣帳となり、時に備忘録となり、時に或は感想文を記す手帳となるなど、誰のもさうではあるが、様々な雜用に用ひられてゐる。従つて懷中に便利な小形のものばかりで、鉛筆のみを用ひてあり、間々、色の覺えを書き込まれたものもあるが、彩色を施したものは甚だ稀である。なほ所々ペーヂが截りとられてゐるが、それ等は後に述べる臺紙に貼られた分の中に這入つてゐるものもある。

スケッチブック第一號から第九號までが滯歐中のもので、明治十九年から同二十四年に亙つてゐる。この間には、ベルギーに旅行さ

れた時、パリ郊外やフオンテヌブローに旅行された時、明治二十四年久米桂一郎先生と一緒に徒歩でフランス東部諸州を過ぎ、ドイツのアルザスからスキス邊まで旅行された時、或は同年同じく久米先生等とブルターニュのブレハ (Bréhé) 島に行かれた時のものなどがある。第一四圖は



第一四圖 ベルギーの男女

明治二十年の夏ベルギーに旅行された時のスケッチで、愈々畫家になる決心をして法科大學を止されたのはその秋のことである。明治二十三年から暫くグレ (Gréz-sur-Loing) に住んで居られたことがある。その附近の牧歌的な風物を収めた一冊 (第七號) がある。(第四圖) 第

二圖はブレハ島のスケッチブック一冊 (第九號) 中の一圖で、その中にはこの繪のほか、島風俗の女の顔、島の風景、羊の群や牝鹿のスケッチなどが描かれてゐる。第三、五、六圖の三枚はどれもスケッチブック第八號のもので、この一冊は旅行中の各地のスケッチがあり、丁寧に描かれたものが多い。

明治二十六年七月歸朝されて後、間もないその年の秋、京都に滞在された時のものが三冊 (第一〇—一二號) その後に續く。「昔語り」の構想を初めて立てられたのはこの時で、第一〇號のスケッチブックの中には、その思ひ付きが色々試みられてゐる。この時の一冊には表紙裏の青い紙に、「Candidates pour mes études」(候補生)「Kimi-in la jeune, Okada Foukouko, Tamiko, Oshima, Harako chanteuse, Komarin」と覚え書きしてあることも面白い。但し繪は添うてはない。その次に、翌年横濱の本牧から鎌倉に夏を過ぎた時のが一冊 (第一三號) ある。これには表紙裏に佛文で「神奈川縣知事の甥なる若きアルタイスト岡田」と書き留めてある。横濱で初めて岡田三郎助氏と面會された時の心覚えであらう。又その帳の中には、先生の肖像畫の大作の一つである東久世伯爵の肖像の、最初の思ひ付きの顔があり、次のページには、その繪のモデルに使つた土屋といふ老人の顔が克明に寫生されてゐる。

第一四—一六號の三冊は、日清戰役に從軍された時のスケッチブックで、當時は主に威海衛の附近に屯されてゐたから、その邊りの陣中風景などが寫生されてゐる。(第七圖) 第一七號は白馬會の出來た明治二十九年と、翌三十年に亘つた時期のもので、大磯と箱根とに於けるものである。

それから非常に間がとんで、次の第一八號は約二十年後の大正五年、日光の旅になる。その間にも無論旅行されたことはあるであらうが、何故かスケッチブックは遺されて居らぬ。スケッチブック第一九號は、大正七年に黒田家の墓地改修の爲、先生が鹿児島に歸郷された時のもので、そのページの一つには次の文字が讀まれて、思

はず微笑を催させる。

「Kora kissouka! Kogenkotzua owansannah! Eh, kora tehiots-shimota! Yoka Sakurajima yoka Sakurajima 思チヨッタラホンノグワンタル櫻島ヂヤツタ見レバ腹カ立ッ」

郷土の言葉で櫻島を呪はれたものであるが、思ふにこれは、大正三年櫻島爆發の年に歸省の際櫻島を見て置かれ、この度の訪問に再び寫生しようと楽しんでゐられた期待が、外れたところからであらう。この冊が最後のものである。なほこれ等の外にも、その後或は中間のものが幾何か黒田家に殘されてゐることと思ふが、余はそれ等を見てゐないので、今は研究所收藏の分のみに止めて置く。

スケッチブックを通じて見たところでは、先生が畫家の修業を始めた滞歐時代のは、やはり明暗を土臺とした、本當のモノクロームの繪畫、出來上つた繪を、スケッチブックの上に作ると云ふ態度が見えてゐる。所謂スケッチとしての、たゞ心覺えと云ふ風なもの或はクロッキ風のものよりは、寧ろ、一枚一枚がそれだけで完成された繪と云ふ氣持のものである。田舎の風景などには、ミレ一の農村の素描を思はせるやうなものが多い。歸朝後のものにもこの手のものが無いではないが、大體は普通のスケッチ風になつて、單に手控へとして、繪になる要點のみを掴まへて備忘の程度に描き止めて置く、と云ふものが主になつてゐる。

一枚づゝに整理されたカルトンの方には、スケッチブックを截りとつたものも混つて居り、内容も種々であるが、それを分けて見れば、單に獨立したスケッチ、出來上つたモノクロームの繪として見られるもの、或は畫稿として作畫の思ひ付きを空想のまゝに描いた

草畫、それに基いて實物に就いて部分的な研究をした、畫稿としての習作などが含まれてゐる。これはスケッチブックの方も同様な譯であるが、たゞ紙の大きさの上からこの方が幾分大形のものが多い。大部分は鉛筆畫で、僅かに色鉛筆、ペン、水彩、それに木炭を用ひたものもある。

遺された先生の素描の中で、記念すべき最初のもは第一圖の自畫像であらう。これには「紀元二千五百四十五年八月四日寫 於巴里府家名町旅店 黒田清輝」とあり、細かく鉛筆を使つて明暗で表はされた丁寧な寫生で、鏡に映つた通りに衿も正直に左前に描かれてゐる。明治十八年、先生二十歳の年で、渡歐された翌年に當る。

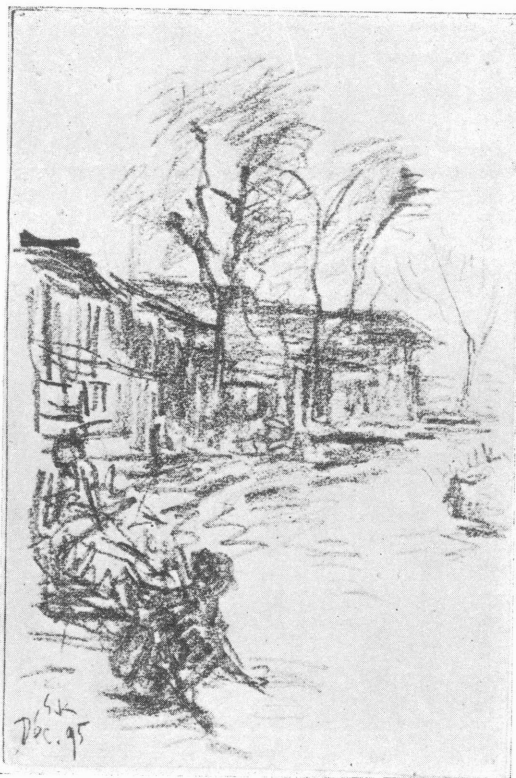
家名町は Avenue d'Iéna のことで、年號もわざ／＼日本紀元が用ひてあるのも、年若く異郷に在つて、日本を懷しむ心持の見られることが嬉しい。海外生活をした人の誰もが一度は經驗する、微かなる懷郷病の現はれと云へるであらう。この外にも滞歐中のスケッチブックの中に、「神武天皇即位紀元二千五百……」と記されたものも見える。

出來上つた鉛筆畫として特に面白いのは、元箱根で描かれた湖畔の寫生四枚、明治三十四年八月の作である。第七圖がその一つで、湖面に飛沫を上げて過ぎ行く驟雨を寫したものであるが、その瞬間の趣のさながらに捉へられて、音が聞えるやうでありながら、落着きと寂びを湛へた好ましい作である。この頃のものになると日本人の氣持がよく現はれて來て、この小品などは、一脈の俳味と相通ずるものあることを覺える。其の他小さな女の顔などに、個性をよく描き現はした、肖像畫として殆ど完成されたと云つても好い素

描がいくつかある。その一つ、第一一圖は明治二十九年大磯で作られたものである。

幾らか變つたものとしては、銚子に旅行された時の作、海岸風景、漁夫、藍干しの圖などの色鉛筆のスケッチ五點がある。(カルトン第六二―六六號) 第九圖の石切場はその中のもので明治三十五年に描かれた。先生は餘り水彩畫を得意とされなかつたせるか、その數は極めて少い。中で「秋景」(カルトン第六七號)は小さなものである

第一五圖 鴨 河 畔



が面白い。これは杉子爵所藏のもの―曾て先代の杉子爵が病床にをられた時、黒田先生の首唱で久米、岡田、藤島の諸氏、余などと共に、スケッチ四十六枚を帙に入れ病氣見舞として贈つたことがある。その中の水彩畫「紅葉圖」―と似通つてゐて趣深いものである。

畫稿として見られるもの、中で、特に注意したいのは、「春野」畫稿の木炭畫三枚(第一二圖)―「春野」は未完成の大作で、この外

油繪の下繪と共に研究所に保存されてゐる―、「其の日のほて」畫稿の木炭畫六枚(第一〇圖)―「其日のほて」は第八回文展出品で、文部省に在つたが震災の時に焼失した―等で、其の他に半紙に毛筆を用ひた畫稿、大漁船が岸に着いて、大勢の村人が群集してゐる構圖を試みられたもの三枚があるが、この圖は油繪には出来なかつた。三枚の繪葉書を描く爲に作られた十枚許りの畫稿がある。巢鴨の精神病院の祝日の爲に、吳秀三博士から狂人を取扱つた繪葉書を依頼されたので、能樂の隅田川、花篋、櫻川の三つの狂人を三枚に描かれたことがある。第一三圖はその畫稿の一枚で、部分的のスケッチが試みられてゐる。繪葉書など、普通には簡単に片附けて了ふものを、これだけの準備をされたことが分つて、そこにも先生の面目が窺はれるやうである。「春夏秋冬」(第七一號)、「春風秋雨」(第六二號)等も畫稿として面白い。

スケッチブックをも通じて氣附くことであるが、歸朝後間もない頃に人物を描かれたものは、日本人が日本人らしくなくて、着物の着こなし、姿勢、表情等凡てが甚だ西洋人臭味を帯びてゐる。西洋人が日本の服裝を着けたやうであり、西洋人の描いた日本人のやうである。別に保存されてゐる「昔語り」の下繪を見ても、それが目立つて見える。併しこれが明治三十年頃から以後次第に消えて、日本人の氣持ちになつて行くのは興味が深い。

美術研究所には先生の各時代の油繪や木炭畫の、殊に習作の類が多く藏されて陳列されてゐるが、それ等と共に研究的興味の深いスケッチブックの類は比較的知られることが少いので、以上に簡単な紹介を試みたまでである。



第一圖 自 畫 像



第三圖 食事中の久米桂一郎氏



第二圖 プレハ島の少女



第 四 圖 風 景



第 五 圖 風 景



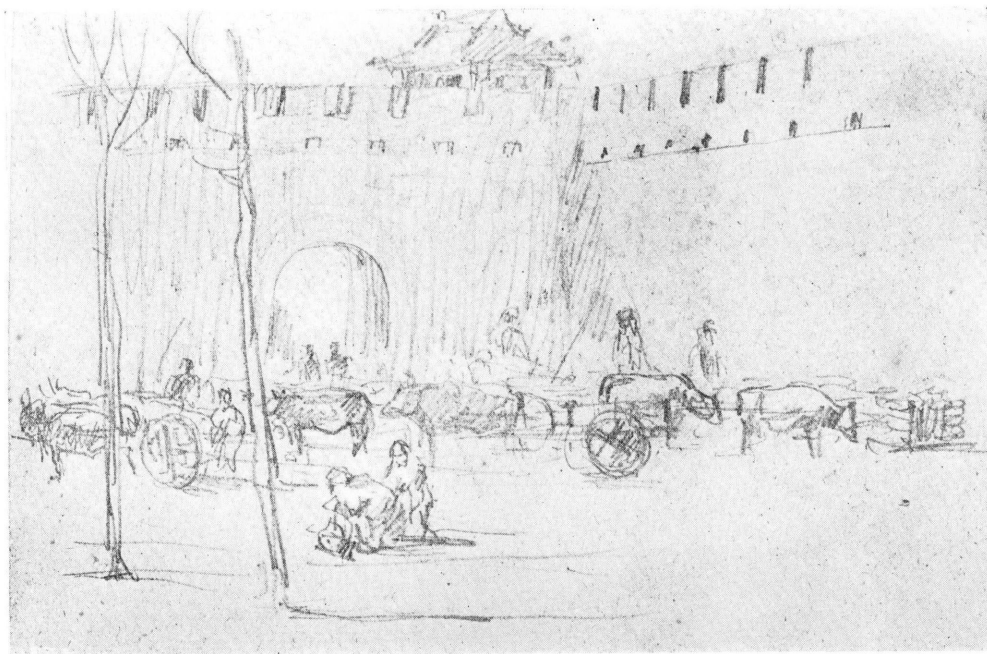
第 六 圖 風 景



第七圖

驟

雨



第 八 圖 日 清 戦 役 従 軍 ス ケ ッ チ



第 九 圖 石 切 場



第一〇圖 「其 日 の は て」 畫 稿



第一一圖 少女の横顔



第一二圖 「春野」畫稿



第一三圖 「三狂女」畫稿

挿圖

第一圖	自畫像 (鉛筆四〇×三二糎)	カルトン三七號	明治九年	バ	リ
第二圖	ブレハ島の少女 (鉛筆六×二・四糎)	スケッチ ブック	九號	明治四年	ブルターニ ユブレハ島
第三圖	食事中の久米桂一郎氏 (鉛筆七・五×二・五糎)	〃	八號	明治四年	ローレーヌ
第四圖	風景 (鉛筆一〇×一七・五糎)	〃	七號	明治三年	グ
第五圖	風景 (鉛筆一一・五×一七・五糎)	〃	八號	明治四年	ローレーヌ
第六圖	風景 (鉛筆二・五×一七・五糎)	〃	〃	〃	〃
第七圖	驟雨 (鉛筆三二×二四糎)	カルトン	六號	明治四年	元箱根
第八圖	日清戰役從軍スケッチ (鉛筆三・三×一八・五糎)	〃	一六號	明治二年	滿洲
第九圖	石切場 (色鉛筆一一×一八糎)	〃	六號	明治五年	銚子
第一〇圖	「其日のはて」畫稿 (鉛筆三×二四・五糎)	〃	一一號	大正三年	〃
第二圖	少女の横顔 (鉛筆一四×一一糎)	〃	五八號	明治元年	大磯
第三圖	「春野」畫稿 (木炭三二×二四糎)	〃	三號	〃	〃
第三圖	「三狂女」(繪葉書)畫稿 (鉛筆二・五×一八・五糎)	〃	二一號	〃	〃
第四圖	ベルギーの男女 (鉛筆九・五×一五糎)	スケッチ ブック	三號	明治三年	ベルギー
第五圖	鴨河畔 (鉛筆一八×一二糎)	〃	四七號	明治六年	京都

淨瑠璃寺及清雲寺の吉祥天女像

丸尾 彰 三 郎

一

「國華」第卅九編第十冊 (昭和四年十月號) に於いて自分は「日本彫刻史上に於ける木彫の衰滅」と題して、我國の彫刻史上重要な位置を占める木彫が何時頃どのやうにしてその生命を失つたかといふことに就いて説いたが、その際の京都淨瑠璃寺吉祥天女像に就

いてこの問題に關する一つの考察を爲したのであつた。

即ちかの像に於いてその佛身に纏ひ着けて居る瓔珞が像自身と同じく木製であることを特に取り立て、

- 一、その木製であるのは木彫主義を遵奉して居るものであり、
- 二、鎌倉時代の製作に於いてはこれを必ず銅製とするので、それは實物の金具の瓔珞をその用材のまゝに模倣したのであつて、